

「イスラエル建国史」

13 実践主義に転換する シオニズム運動

ユダヤ・中東研究家 滝川 義人



滝川 義人
Takigawa Yoshito

1937年長崎県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。イスラエル大使

館チーフ・インフォメーション・オフィサー(1968～2004)として勤務。

現在、MEMRI(メモリ、中東報道研究機関)日本代表。ユダヤ、中東研究者。

主要著書：『ユダヤ解説のキーワード』(新潮社)、『ユダヤを知る事典』(東京堂出版)など多数。

◆シオニスト運動の父ヘルツェル亡き後も、東アフリカ入植案(ウガンダ計画)をめぐってシオニスト機構内では対立が続く。同案が第7回シオニスト kongress で圧倒的多数で否決されると、東アフリカ案の賛成派は分派行動に出る。しかしこの方向性(自治領主義)は結局うまくいかず、その指導者であったシルキンもシオニスト機構に復帰する。そうする間に、イスラエルの地では2回目の大規模移民の波、第2アリアの時代を迎える。

有為の青年たち

1904年に始まる第2アリアは、第一次世界大戦の勃発する1914年をもって一区切りになるが、約4万人が定着したと思われる。生活苦のため流出が激しかった。しかし、残った移民の中には有為の青年たちがそろっていた。ざっと名をあげても、初代首相となるダビッド・ベングリオン(1886～1973)、第2代大統領イツハク・ベンツピ(1884～1963)、第3代大統領ザルマン・シャザル(1889～1974)、第2代首相モシェ・シャレット(1894～1965)などが、すぐでてくる。この時代はシオニズム運動が実践主義に転換し、キブツや組合、労働運動などイスラエル社会の基盤が成長を始めた時期である。

ダビッド・ベングリオン

ロシアのペイル(ユダヤ人強制隔離地)内のプウォニスク(現ポーランド)に生まれたベングリオンは、父アビグドル・グリーングリンの設立したヘブライ語教室に学んだ。少年時代にシオニズムに目覚め、1903年に発生したキシニョフのポグロムで決意する。翌年ワルシャワに行



ダビッド・ベングリオン

くと、ポアレイ・ツィオン運動に参加、1906年にいよいよ決行した。まだ19歳のベングリオンは、小さな蒸気船に乗って黒海を渡り、2週間後に港町ヤッフォに到着した。

行き先は、徒歩で2時間ほどの農場ペタハティクバである。すぐに農業労働者として雇われ、宿舎に落ち着いたベングリオンは、父親あての手紙で第一夜の印象を、「一睡もしませんでした。草花の濃厚な匂い。ロバのいななき。そして風にそよぐ果樹園の葉擦れ。空は満天の星明かりです。何ともいえない豊かな気分で、おとぎ話の世界に入ったような体験でした。夢が実現したので」と書いた。

しかし、現実はその甘くはなかった。ユダヤ人労働者は、アラブの安い労働力と競合し賃金は安い。ベングリオンの仕事は、牛舎の糞を集め、手押し車で果樹園へ運び、肥料としてまくことであった。湿地からマラリア蚊が文字通り雲霞うんかのようにわきあがり、ベングリオンはマラリアにかかり、医者ポーランドに戻って勉強を続けた方がよいと勧告した。



ペタハティクバ(1912年)

ペタハティクバでの生活

ペタハティクバ(希望の門)の名前は、ホセア書2:17「私はぶどうの園を与え、アコル(苦悩)の谷を希望の門として与える」に由来する。エルサレムに住む正統派の人々が、農業で生計をたてようとして、1872年に購入した土地(850エーカー)であった。トルコ当局が土地の取得を制限したので、購入できたのはヤルコン川流域しかなかった。

緑があり、地味豊かな土地に見えたが、マラリア猖獗地(しょうけつち)で入植者の病没が相次ぎ、4年後に放棄された。その後ロスチャイルド家

が経営の建て直しをはかり、ついで1900年にユダヤ人入植協会が事業を引き継いだ。

マラリアという風土病に加えて、社会基盤の整備されていない新天地は、厳しい生活環境下にあった。1904年から06年にかけて移住してきた人々のうち、新天地に残留し定着したのは、20%弱といわれる。労働運動・組合運動で指導的役割を果たすことになるベール・カツネルソン(1887～1944)は、ベラルーシのボブリスク出身で、肉体労働の経験を十分積んでから、1909年に移住したが、経由地のオデッサや到着地のヤッフォで、失望して出身地へ戻ろうとする多くの若者に会った。カツネルソンは、皆がシオニズム運動に幻滅していたと述懐している。

ガリラヤでの生活

現地に踏みとどまったベングリオンは、1年後にガリラヤ地方へ向かった。当時ガリラヤ湖南西域にユダヤ人入植協会が土地を購入し、開拓村が4～5か所作られていた。1人の友人とペタハティクバを出たベングリオンは、徒歩でまずナザレを目指し、そこから2日後に目的地のセジェラに到着した。ガリラヤ湖まで約15キロの開拓地で、1902年に開村したが、まだ土地整備の段階にあった（ここは後年イラニアと名を変えた。100家族ほどのモシャブである）。

ベングリオンは、46名の若者たちと共同生活を送った。彼らは5棟の木造小屋に居住し、すべて平等の原則で生活した。作業は岩石を除去し、トゲのある低灌木を引き抜くつらい労働で、水も十分になく衣食住共に原始的な生活であったが、高地のすがすがしい気候は心地よく、メンバーたちは強い同志愛で結ばれていた。このコミュン生活からキブツが生まれる。その第1号が1909年創設のデガニアである。



キブツ第一号のデガニア (出典: Degania Alef Archive)

第8回シオニスト kongress

1907年8月ハーグで開催された第8回シオニスト kongressは、シオニスト機構の会長に実業家のダビッド・ヴォルフソンを選び、運動方針も政治シオニズムから実践シオニズムにきり変えた。しかし、政治運動に固執するメンバーも多く、ルーマニア代表のラビ・ヤコブ・ニーマイローアーの発案で、実践と政治運動を組み合わせた統合シオニズムという呼称が使われた。kongressは、パレスチナオフィスの開設、パレスチナ土地開発公社の設立を決めた。

1904年に移住した若者の中にはユダヤ人労働者による自力労働を主張する者が多かった。1908年世界シオニ

スト機構から派遣されたアルトゥル・ルッピン(1876～1943)は、ヤッフォにパレスチナオフィスを開設し、入植者協会の土地購入担当のエホシュア・ハンキン(1864～1945)をシオニスト機構の土地購入責任者に任命する一方、ガリラヤ湖南西端にキネレットという農業訓練所を開設した。

教育の整備

国民統合の柱である教育も少しずつ整備されていった。第1アリア以前のエレットイスラエルでは、日本の寺子屋や塾に相当するヘデルが一般的で、イエメンやイラクから来たミズラヒ(東方)系ユダヤ人社会は、クッタブという教室を持っていた。いずれも初等学校レベルの教育を施していた。

近代的な学校が生まれたのは1855年。オーストリアの実業家ジューモン・フォン・レメルを記念してレメル学校

と称した。娘のエリザ・ハーツが父の死後遺産をウィーンユダヤ人協会に寄付し、協会がエルサレムに創立したのである。しかし、円滑に話が進んだわけではない。反対したが、アシュケナジ

系のユダヤ人社会であった。エルサレムの社会は、ハスカラ(啓蒙期)以前の状態にあった。

エルサレムのスファルディ系社会はこの学校の教育を支持した。40名の学生(寄宿20、通学20)で開校した。使用言語はドイツ語。8年後にヘブライ語の教育も導入している。その後学校法人として発展し、付属の教員養成所1、男子校女子校の初等学校5、高校、実業学校、夜学校各1幼稚園は11ヶ所あった。その運営にかかわっていた



エリエゼル・ベンイェフダ

のがドイツ・ユダヤ人援助協会(Hilfsverein Der Deutschen Juden)である。

ヘブライ語で全部教育する学校が生まれたのは1889年、リションレツィオンの小学校であった。話し言葉としてヘブライ語を復活したのは、エリエゼル・ベンイェフダ(1857～1922)の功績であるが、学校教育に導入して普及に努め、イスラエルの国語として定着させた功績は、教師たちにある。

中心的役割を果たしたのが、ヘブライ語教師60名で構成される教師中央委員会である。1903年、ウシシュキン(ウシシュキンの肝煎りで生まれたエレットイスラエル・ヘブライ教師協会(後にヒスタドールト・ハモリムと改称)の執行部である。委員会は特定の学校を支配しているわけではなかったが、非常な権威があった。1906年に初等教育のカリキュラムを提案し、4年後には教師検定試験委員会を設置した。ヘブライ語の教科書その他、ヘブライ語による教育資料を発行したのも、この委員会であった。

ヘブライ語の教科書(数学、物理、化学、地理、自然科学など)を使用する高校が生まれたのは1905年。ヤッフォで開校したが、後にヘルツェリアへ移り、ヘルツェリア・ギムナシアという名称になり、優れた人材を多数輩出した。1908年以降つくられた開拓村は、いずれもヘブライ語による小学校を併設した。

1903年冬、援助協会の手でハイファに工科大(テクニオン)がつくられ、施設の完成間際に重大問題が発生した。教育現場における使用言語をめぐる、援助協会と教師協会が激突したのである。



初めてすべての授業がヘブライ語で行われたリションレツィオンの学校 (出典: MathKnight, Hebrew Wikipedia & WikiCommons)